

学校だより たぐち

佐久市立田口小学校 平成28年 11月10号

学力学習状況調査の結果 (国語)

本年度も4月に実施した学力学習状況調査の全国と長野県の結果の発表がすでに行われています。ここでは、状況についてお知らせすると共に、内容について設問に関わって分析した内容をお知らせしたいと思います。

1 国語Aに関して

(1) 結果 「ほぼ全国や県平均と同じ」でした。

(2) 領域別の傾向

① 上回っている領域

ア) 「書くこと」について

【2】の設問

○ 設問の概要・・・ルール説明の表現について助言した内容として適切なものを選択する

○ 出題の趣旨・・・書き手の表現の仕方をよりよくするために助言する

* この項目については、上回っていました。書かれている文章の目的が明確に理解されれば、表現の仕方を自分なりに工夫し、よりよくする助言が出来る事を意味していると考えます。

② 下回っている領域

イ) 「読むこと」について

【6】の設問

○ 設問の概要・・・『おばあさんの飛行機』を読んで、登場人物の人物像を説明するために、根拠となる表現として適切なものを選択する。

○ 出題の概要・・・登場人物の人物像について、複数の叙述を基にしてとらえる

* この設問に関しては下回っています。叙述から読み取ることや、関係付けて考えをまとめるといった思考に困難さがうかがえます。また対象に思いを寄せる事に、苦手さを抱えているかもしれない。また、物語の学習に面白みを感じていない可能性もあると考えます。

ウ) 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

○ 設問ごとに見てみると、

* 漢字の読みや書きは、漢字によって差はあるにしても、定着している様子がうかがえます。

* 毛筆は、平均(県・全国)を上回っています。

* 下回っているのは、ローマ字に関する書く、読むが出来ていないことです。

2 国語Bに関して

(1) 結果 「ほぼ全国や県平均と同じ」でした。

(2) 領域別の傾向

① 上回っている領域

ア) 「話すこと・聞くこと」について

* 国語Aにおいても 話すこと・聞くことは平均値を示し、子供たちに力が付きつつあると考えます。

*設問の中で唯一、「話し手の意図をとらえながら聞き、話しの展開に沿って質問する」の趣旨に対する正答率が若干下回りました。このことは、話し合うという言語活動におけるコミュニケーションに子供たちが困難さや不慣れさを覚えていると考えられます。話す相手や聞く相手は、教師の場合もあれば、児童同士の場合もあります。どこでどのような相手に対しても、聞く話すということが出来ることが求められるとすれば、対教師ではなく児童同士のコミュニケーションに移行し、相手や場面に広がりが見られるようになることが求められます。

② 下回っている領域

ア)「書くこと」について

*やや下回っています。A問題では、やや上回っていましたが、B問題では反対の結果になりました。

*B問題の「書くこと」に関わる設問の中で正答率が芳しくない出題の趣旨を見ると、「話の展開に沿って質問する」「わかったことを的確に書く」「表をもとに自分の考えを書く」とあり、問題状況に合わせて自分の思ったことや考えを持ち、記述することに抵抗感を持っていることがうかがえます。

イ)「読むこと」について

*「読むこと」に関わる出題の中で、やや下回っている設問は一つだけでした。この設問の出題の趣旨には、「自分の考えを明確にしながらかく読む」とあり、自分の考えを持ちきれないままに学習している様子がうかがえます。つまり、自分の問題として自覚しないままに学習している児童がいるということ。

3 分析から国語の授業や家庭において配慮したいこと

- 1 問題状況の把握が十分に出来ておらず、状況把握が不十分のまま問題に取り組もうとしている傾向があります。何が問題であり、何が滞っているからこういう状況になっているかをその子なりに理解して行くように指導することが大切です。教師側（大人）が「一方的に設定した内容」で授業を進めることは、子供たちの問題状況の把握する力を伸ばすことにはつながっていかないと考えます。また、家庭においても同様なことが言えて、子供たちが学習にかかわらず家庭生活場の問題を理解して取り組む状況を大事にして行くことが求められると考えます。
- 2 言語活動について述べると
 - ① 「話すこと」についての指導の必要性があります。自分の考えを持ち、その根拠を問いつつといった授業場面を授業の中で可能な限り準備する必要があると考えます。その際に「書くこと」も重要になります。ねらいに基づき、自分の考えを自分の言葉で表現（発言・記述）するといった指導や場面を重視した指導が必要だと考えます。日記や自分の考えの説明など、記述することを大事にしていく必要を強く感じます。
 - ② 「聞くこと」は、結果から見ると出来ているように見えますが、果たして互いの意見や教師の問いや指導を「自分事」として、「自分の問題」として「聞いているか」は吟味の必要性を感じます。「自分事」としてとらえているかが大きな分かれ目のように考えます。
 - ③ 自分なりの意味理解を問う必要があります。間違っていたらどうしようや恥ずかしさが先立っている様子が見えます。自分の理解したことを伝え表現すること（学校・教室は間違ふところ、間違いから学ぶ場）を根底にした授業を実践していく必要があると考えます。
- 4 伝統的な言語文化と国語の特質に関しては、ローマ字の学習を繰り返し行う必要があります。

未来に生きる子供たちに必要な力：文部科学省は指導要領の改訂を進めています。近々には、大まかな方向性が示される段階になっています。そんな中でこれからの社会で求められる資質能力を下記に規定しています。

- ① 「何を知っているか、何ができるか」（個別の知識・技能）
- ② 「知っていること・できることをどう使うか（思考力、判断力、表現力など）」
- ③ どのような社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性など）

もちろん教育の目的は「人格の完成」です。そのために必要な資質や能力を上記のように示しているといえます。グローバルな社会で生きていく必要性を求められる子供たちは、①～③の全てを特に②と③を今まで以上に重視しなければならない状況に置かれることは明らかです。英語は人工知能の発達で、自動翻訳が瞬時に出来る時代になるかもしれません。むしろ、こうしたことを使って何を伝え表現していくのか、もっと言えば何を創造していくかと言うことが重要になるのだと考えます。いじめや差別は、創造的な行為とは真逆な行為であることは、誰の目にも明白なことではないでしょうか。11月は「なかよし月間」です。